

# かたりべ129

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



消しゴムはんこの数々とサンプル葉書



オモトをモチーフにした消しゴムはんこ



一心不乱に残暑見舞いはがき作りに取り組みました

## 消しゴムはんこを捺す夏！ 郷土資料館の夏！！

郷土資料館では、第二回収蔵資料展「江戸園芸資料コレクション」の関連事業として、「はんこペタペタ！暑中（残暑）見舞いはがきを作ろう!!」と題し、消しゴムはんこを使った暑中見舞いはがきと残暑見舞いはがきを作るワークショップを、七月二一日と八月一八日に開催いたしました。

「消しゴムはんこ」とは、版画用の消しゴム板を使ってはんこを制作するもので、図案や文字をトレーシングペーパーに書き写し、ゴム板に転写させて切り彫りしていくものです。制作する工程は木版画とほぼ同じですが、版木を切り彫りするよりも作業が容易で、また最近メダイアでも取り上げられていることもあり、世間での注目度が上がっています。

作業が容易とは言え、一般の方が消しゴムはんこそのものを制作するには多くの時間がかかるため、今回のワークショップでは、二十数種類の消しゴムはんこを事前に制作しておき（酒井制作）、当日のワークショップ参加者には、はがき（定形の画仙紙など）に消しゴムはんこを捺してもらい、オリジナルのはがき作りを各々三〇分程度体験していただきました。

七月の回では、収蔵資料展で展示されている植物図譜に描かれるヒマワリ・アサガオ・オモトなどの草花をモチーフに、また八月の回では、トンボ・カブトムシ・金魚などをモチーフにした消しゴムはんこを追加制作。一部入れ替えながら、子どもからお年寄りまで幅広い年齢の方々にペタペタ捺して楽しんでいただきました。体験前は「はんこを捺すだけなら…」と簡単に考えていた参加者も、いざ捺してみるとその配置や色づかいなど、デザインを考える際に自身のセンスが問われることに気づき、顔つきが一変、真剣に向き合う姿が印象的でした。

郷土資料館では、消しゴムはんこを使ったワークショップを今後も実施していきたいと思っています。詳しくは、『広報としま』や当館のホームページをご覧ください。

（郷土 秋山・酒井）



稀観本の蒐集家として貴重な書籍を数多く所蔵していた鈴木信太郎ですが、彼のコレクションの中でもとっておきの一冊が、『シラノ・ド・ベルジュラック ポン・ヌフ橋畔にてブリオツシエの猿と格闘』(原題 *Combat de Cyrano de Bergerac avec le singe de Brioché au bout du Pont-Neuf*) (以下、『シラノ格闘』) (図1)です。

シラノ・ド・ベルジュラックというと、信太郎が訳したエドモン・ロスタンの戯曲(一八九七年発表。信太郎と辰野隆共訳の『シラノ・ド・ベルジュラック』は一九二二年刊<sup>①</sup>)の主人公をまず思い浮かべる方も多いでしょう。シラノは実在(一六一九―一六五五)した人物で、戯曲にも描かれているように巨大な鼻を持った剣の達人で、作家としても活躍しました。ロスタンの戯曲から遡ることおよそ二世紀、一七〇四年に刊行されたこの本に



図1

は、ボン・ヌフの近くでパリ最古のマリオネット(操り人形劇)劇場を営んでいたジャン・ブリオツシエの一座に大きな鼻を馬鹿にされた主人公が剣を振るう様子が描かれています。「ブリオツシエの猿」とは座長の可愛がっていた猿ファゴタンで、モリエールをはじめ当時の文学作品にも度々登場した有名な猿でした。信太郎は「本の雑談」という随筆の中で『シラノ格闘』を紹介しています。それによると、この本は九州帝国大学の仏文教授、成瀬正二(一八九二―一九三六)が、上京時に世話になった礼として、東京帝国大学の仏文科で信太郎と共に教鞭を執っていた辰野隆に贈呈したもので、その後、稀観本の蒐集家であり、辰野と共に『シラノ』

を訳した信太郎の手に渡りました。「奇書」と墨書きされた桐箱の蓋を



図2

取り、さらにタトウを開くと現れた小さくて薄い総革張りの表紙の本。表紙の見返しには、繊細な装飾が美しい五枚の蔵書票が貼り付けられています(図2)。上記随筆によると、左上より一九世紀初頭のロマン派運動の中心となった小説家であり、アルスナル図書館長にして愛書家のシャルル・ノディエ(Charles Nodier, 1780-1844)、信太郎の友人岸田國士<sup>②</sup>の名訳で知られる『にんじん』や『博物誌』の作者ジュール・ルナール(Jules Renard, 1864-1910)、ボルドーの著名な蔵書家エドゥアール・ムラド(Edouard Moura 生没年不詳)の蔵書票。右側が二〇世紀初頭の詩人ド・フルーリ男爵(Baron de Fleury 生没年不詳)(上)と信太郎(下)の蔵書票です<sup>③</sup>。

こうした由緒ある来歴を持った書物に、「唯の美しい本では無いぞと眼玉の底に彫りつけた」信太郎は調査を進めます。そして一九世紀中葉の古典学者で珍本蒐集家のエドゥアール・フルニエが編集した『歴史的文学的雑録』(全一〇巻)にたどり着きました。この書物の第一巻には、『シラノ格闘』が解説つきで再録されています。その解説によると、一七世紀半ば

と推定されるこの本の初版はすべて失われ、ただ一冊残った一七〇四年の再版はかつてノディエが所有していたものの、後に別の人物の手に渡り、彼から借用して再録に至ったということです。その後、ルナールをはじめとする愛書家たちの手を経て、さらに海を渡り信太郎の元にたどりついた『シラノ・ド・ベルジュラック ポン・ヌフ橋畔にてブリオツシエの猿と格闘』。「世界で一冊」かどうかは再考の余地がありますが<sup>④</sup>、たいへん貴重な書物であることには変わりありません。

① 信太郎・辰野隆共訳の『シラノ』に関して、詳しくは「旧鈴木家住宅」の資料たち 第八回「かたりべ」二二二号、二〇一六年)参照。

② 信太郎の蔵書票に関して、詳しくは「旧鈴木家住宅」の資料たち 第十一回「かたりべ」二二五号、二〇一七年)参照。

③ 現在ペリグー図書館が所蔵している『シラノ格闘』は、一七〇四年版を一八五九年に翻刻したものであり、当館所蔵資料と出版元も刊行年も同じですが、扉部分を比べると書体や装飾が若干異なります。

④ 参考文献 鈴木信太郎「本の雑談」、『帝国大学新聞』一九三二年六月二十九日号/辰野隆「書狼書豚」、『え・びやん』、白水社、一九三三年 / Fournier, E. (revues et notes), *Variétés historiques et littéraires: recueil de pièces volantes rares et curieuses en prose et en vers*, Tome I, P. Jannet, 1855-1863

## 豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、今日まで多くの作家が暮らし、集い、活発な創作活動を行ってきました。小説、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも一〇〇名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりをご紹介します。

### 探偵小説家 飛鳥 高

(一九二一年)



飛鳥 高氏 (2018年7月11日撮影)

◆『かたりべNo.122』(二〇一六年二月発行)には、インタビュアー「探偵小説家・飛鳥高先生に聞く」(インタビュアー/安達愛)が掲載されています。そちらもあわせてご覧ください。

### 【生い立ち】

飛鳥高は、一九二一年(大正一〇)年二月二日、現在の山口県防府市で生まれ

ました。本名を烏田専右からまたせんすけといいます。

幼くして父を亡くし、烏田家の養子となった飛鳥でしたが、二四歳で迎えた終戦時にすでに養父は亡く、建設会社で働きたながら、一九四六(昭和二一)年、探偵小説雑誌『寶石』の懸賞小説に応募し「犯罪の場」で入選、デビューを果たします。その後二年半の間、作品を発表することはありませんでしたが、思わぬ形で作家生活を再スタートさせることとなります。

### 【豊島区池袋へ】

一九四九(昭和二四)年一〇月、結婚して住むことになった家は、偶然にも豊島区池袋三丁目(現西池袋五丁目)に住む江戸川乱歩邸の隣でした。『宝石』懸賞小説の選考委員をしていた乱歩は飛鳥の作品を推しており、飛鳥のことを覚えていました。

乱歩の妻は飛鳥の家を訪ねると小説を書くように勧め、飛鳥の妻にも「一作でやめるのはもったいないから、もっと書くように説得しなさい」と言うこともあったといいます。その頃には、小説を書くことを諦めていたという飛鳥は、この出会いをきっかけに、再び作家の道歩みはじめました。

飛鳥はデビューから約一〇年後に初の長編小説『疑惑の夜』を執筆しています

が、デビュー当時、飛鳥に長編を書くことをすすめたのは乱歩でした。

隣同士自然に交流は深まり、お互いの子どもたちは一緒に幼稚園に通ったり、乱歩の作品に検印のハンコを捺す手伝いをしたりしていたそうです。

### 【二足のわらじ】

「犯罪の場」でデビューし、「疑惑の夜」で第三回江戸川乱歩賞次席となるも、飛鳥は作家としての能力に自信が持てなかったといえます。そのため、七〇歳で退職するまで、建築の仕事と併行して創作活動を進めていました。平日は午後五時に仕事が終わわり、そのあとの二、三時間と休日を執筆にあてながら、年に一〜三作、時には一〇作のペースで書いてきました。

二〇一八(平成三〇)年六月にお話を伺った際、飛鳥は「小説もまた、建築と同じように組み立てていくもの」と言っています。飛鳥作品には、建築や建設業に関する記述が多く見られます。飛鳥高のミステリーは、仕事で培った経験を背景にしているからこそ、緻密ちみちに組み立てられているのでしょう。

### 【現在の飛鳥高】

飛鳥は、二〇一八(平成三〇)年二月二日に、九七歳を迎えました。

多いときで年に約一〇作のペースで書き続けていましたが、昭和四〇年代に入ると、建設業の忙しさからだんだんと作品数が減り、一九九〇(平成二二)年、六九歳のときに上梓した『青いリボンの疑惑』を最後に創作活動からは遠ざかりました。しかし、その後も選集が編まれています。今もなお、寄稿や再録に合わせて増補加筆される姿からは、楽しみながら書くなかで、探偵小説を極め続ける飛鳥高の思いが感じられます。

(文学・マンガ 西方)

今回は、飛鳥高氏のご協力のもと執筆させていただきました。略儀ながらここに御礼申し上げます。

### 【参考文献】『推理作家・飛鳥高《著作》』

《著書》リスト・他「二〇一四年、芳林書房」『飛鳥高探偵小説選Ⅰ(論創ミステリ叢書95)』二〇一六年、論創社／『飛鳥高探偵小説選Ⅲ(論創ミステリ叢書105)』二〇一七年、論創社／『乱歩の世界』二〇〇三年、江戸川乱歩展実行委員会

◆二〇一八(平成三〇)年一〇月二日より、区庁舎3階にて、庁舎まるごとミュージアム「飛鳥高と豊島区」と題したパネル展示を開催いたします。飛鳥氏所蔵の日本探偵作家クラブ関係資料や創作ノートなども写真で紹介しております。ぜひ足をお運びください。

# 宿坂の怪

— 暗闇坂の伝承 —

東京メトロ副都心線雑司が谷駅から程近くに、「暗闇坂」というなんとも怪しげな別名のついた場所があるのをご存知でしょうか。目白通りから面影橋（高田二丁目）方面へと下っていくこの坂道は、正式名称を宿坂と言います。鎌倉時代に宿坂の関という鎌倉街道の関所が設けられていたと伝わるその場所は、かつて樹木が鬱蒼と生い茂る薄暗い坂道で、妖怪や幽霊が現れるという怪しい噂があったと言います。そのなかに、人々を化かす狐狸の話があります。ここに簡単にご紹介しましょう。

紅葉狩を楽しみに神田の商人たちが面影橋あたりにやって来ました。紅葉がちょうど盛りの頃で、商人たちは大盛り上がりです。南蔵院（現高田二丁目）を抜け、宿坂に差しかかると、晴れ渡っていたはずの空が消え、急にあたりが暗くなりました。商人一行が息をのむと、突然足が重い鉛をつけられたように上がらなくなり、それぞれの足元にめらめらと炎が燃え立ちました。やがてその炎はくるくると舞い上がり、

縦横無尽にあたりを駆け回ります。その動きを見て、商人の一人が「狐狸に化かされているぞ、気をつけろ」と大声で叫びました。すると、ぱつと火が消え、道も元の昼の明るさに戻りました。軽くなった足取りで坂を駆け上がり、一行はたどり着いた護国寺（現文京区大塚五丁目）の門前の茶屋でその話をしたところ、茶屋のおかみさんが「やっぱりやられましたか」と深くうなずきました。それは宿坂に棲む狐狸のいたずらで、暗闇や炎の他にも、石を降らせることもあるそうです。（一九七四年発行『豊島の民話』所収「おぼけ坂」より要約）

狐狸に化かされた民話というと、昔懐かしい里山の情景を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。現在の宿坂周辺（**図1**）の閑静な住宅街からは、想像が難しいかもしれませんが、天保年間（一八三一〜一八四五）刊行の『江戸名所図会』に描かれた宿坂（**図2**）には、金乗院（現高田二丁目）の周辺に樹木が生い茂っている様子が見て取れます。「暗闇坂」の別名通り、昼間でも樹木の影で薄暗く、怪異が起ころとも不思議はない、そう人々に認識されるような不気味な雰囲気



図1 現在の宿坂



図2 『江戸名所図会』に描かれた宿坂

気の場所だったのでしょうか。

**図3**の地図を見ると、この民話に登場する商人たちの、面影橋から南蔵院を抜け、宿坂に差しかかり、護国寺へと至る道中が想像できます。地図にある根生院（高田二丁目）は、かつて徳川御三卿の一、田安家が下屋敷を構えていた場所で、屋敷人を崇り、供養された狸の民話（同『豊島の民話』所収「たぬき騒動」）が伝わる場所でもあります。武家屋敷の庭は樹木も多く、宿坂同様、狐狸が棲みつく恰好の薄暗い茂みがあったのではないのでしょうか。

都内二三区には、他にも「暗闇坂」、「闇

坂」といった名前のついた坂が点在しています。豊島区近隣では、文京区の本郷や白山、新宿区愛住町などが挙げられ、かつては寺社や武家屋敷がすぐ側にあつたため、樹木が鬱蒼と生い茂り、薄暗かつたことが由来とされています。宿坂と同様に狐狸や妖怪、幽霊などの伝承が残されている場所もあります。現在は、いずれも住宅地などに囲まれ、薄暗く怪しげな当時の様子を知ることは難しいですが、地名や民話などの伝承に、かつての様子を窺い知る手がかりが残されていることもあります。民話などの伝承は、必ずしも実際にあった出来事とは限りませんが、かつての地域の情景を推測するヒントになることもあるのです。（郷土 岩崎）



図3 宿坂周辺地図（一部抜粋）

# としまのどうぶつし・多岐亡羊編

二〇一八年は巢鴨<sup>うぐえん</sup>菜園が設置されてから二二〇年にあたることをご存知ですか？菜園とは読んで字のごとく、薬となる植物の栽培場所です。その歴史は古く、日本では八世紀初めには既に律令上に登場します。そこから時代はぐっと下り、江戸幕府では国内産の薬用植物の栽培に非常に尽力し、雑司ヶ谷や小石川などいくつもの官営の菜園を設けていました。巢鴨への設置は他の菜園より遅く寛政一〇年（一七九八）になってからです。現在、菜園があった場所には東京都中央卸売市場豊島市場があり、豊島区教育委員会による史跡案内板が建てられています。

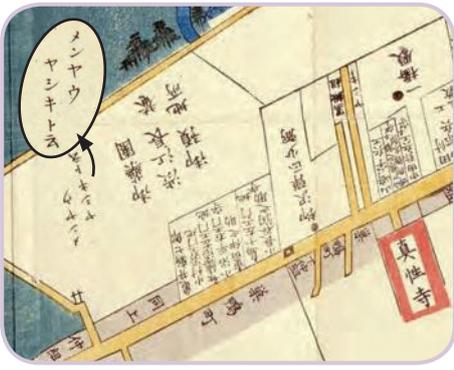


図1：館蔵、尾張屋清七版江戸切絵図、嘉永七年「染井・王子・巢鴨邊絵図」

園とは少し毛色の異なる場所だったようです。嘉永七年（一八五四）の江戸切絵図（図1）を見ると、当地は「メンヤウヤシキ」と呼ばれていると記されています。このメンヤウとは綿羊、すなわち毛糸を取るための羊のことです。柳宮日記でも「巢鴨綿羊小屋」という言葉が出てくることから、どうやら植物園のような場所ではなく畜産場又は畜舎を備えた牧場のような場所だったことが窺えます。ちなみに、「綿羊」自体について少し言及しておきましょう。そもそも、古代から日本列島では羊が生息せず、大陸から献上品としてもたらされていました。江戸時代には清<sup>しん</sup>やオランダ経由で輸入され、巢鴨菜園でも清<sup>しん</sup>から輸入した羊が繁殖していました。しかし、現在私たちが見慣れている羊（図2）はヨーロッパで改良された品種がほとんどです。明治初頭の『牧羊生徒試業録』には「支那羊」・「蒙古羊」という品種の記述があることや、『大窪動物譜』に残された綿羊（図3）の姿からは巢鴨にいた羊がモコモコしたものでは無かったと考えられます。しかし、「菜園」で羊を飼育することに

違和感を覚えないでしょうか？巢鴨菜園で綿羊飼育が始まったのは文化十四年（一八一七）であり、それまでは他の菜園同様に植物を栽培していました。東洋医学では羊も薬としての用途を持ちますが、羊を含むヤギの仲間は餌に貪欲なので貴重な薬草も好き嫌いせず食べてしまいそうで、飼育するのに適当な場所だとは考えにくいです。

そこには、渋江長伯<sup>しぶえちやうはく</sup>（一七六〇ー没年不詳）という人物の存在が大きく関係しています。長伯は本草家<sup>ほんそうか</sup>、すなわち東洋医学で薬物となる植物・玉石・禽獣などの研究者として非常に有名な人物でした。長伯は奥詰医師<sup>おくづめいし</sup>として十数か所の菜園の管理を任されるだけではなく、寛政二年（一七九九）からは織物製造にも携わるなど産業面でも多彩な活躍をしていました。それまで幕府・諸藩では、舶来品として



図2：スペインで改良されたメリノ種（執筆者撮影）

で高価だった毛織物を国産化するために、何度か綿羊の飼育を進めてはいましたが、目立った成果は上がっていませんでした。明和八年（一七七二）に平賀源内<sup>ひらがげんない</sup>が羊を輸入し長崎で毛織物の試織に成功したという話がありますが、安定した増産あるいは外国産同様の品質の産出には至らなかったようです。国内の綿羊飼育が発達しなかった理由には、日本に在来種がないため羊の生息（群れが好き、高温多湿は苦手等）があまり知られていなかったからだと後世では指摘されており、幕府は本草学者であり実学にも成果を上げていた長伯に一二、六一〇坪余りの広大な巢鴨菜園を任せることで、安定した生産を目指したと考えられます。現代の感覚だと菜園と羊は結びつきにくいですが、幕府の職制上での判断で飼育されたと窺えます。（郷土 井坂）

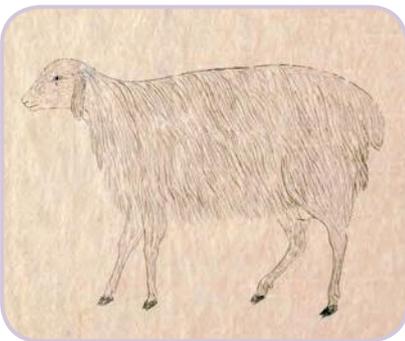


図3：国立国会図書館蔵、伊藤篤太郎写「大窪動物譜」（江戸時代後期・明治十五年写）より「綿羊図」

# 作品を見る読む

13

## 藤本東一良

豊島区のミュージアム開設に向けて新たに收藏となった作品についてご紹介しましょう。



図1 (1942年 45.7×52.8cm)

《ゲラム島スペイン時代の門》(図1)と題された油彩画は、一九三五年から晩年まで豊島区に住んだ画家、藤本東一良(ふじもと とういちろう)による作品です。(一九二二―一九九八)による作品です。ゴーギャンへの憧れに突き動かされ、藤本は一九三七年、東京美術学校油畫科在学中に友人と共に南洋諸島に旅行しています。約二ヶ月でサイパン、ヤップ、パラオを巡り、パラオでは先住民の集会所である「ア・バイ」という建築の壁面装飾の拓本\*をとり帰国しました。作家は

この旅行後数年、南洋諸島を画題に制作発表を続けます。今回の作品もそうした経緯で描かれました。

開け放たれた門から高い椰子や生垣など手入れの行き届いた庭を臨む構図が特徴です。黒い門が背後の雲をたたえた青い空や木々、赤い瓦屋根の小屋の色彩を引き立てています。この門は、ゲラムのハガツニヤ中心部に位置するスペイン広場(Plaza de Espana)内にあるアルマゼンのアーチ(Arches of the Almacén)です。一七三六年、長いスペイン統治時代に建てられました。藤本はこの広場を含む現地の写真を二百枚強持っていました。写真については目的は定かではありませんが、おそらくは興味のあった現地民族の歴史の記録や、風景画の題材のためだったのではないのでしょうか(図2)。



図2

広場全体は一九七四年にアメリカの国家歴史登録財に指定されています。藤本の絵や写真は、作家の興味関心をうかがい知るだけでなく、戦争で破壊される前の土地の記録の役割も同時に果たす歴史的遺産となりました。

藤本は、油彩画の他にも版画を手がけており、戦前までは版画の専門誌にも作品を数多く発表しています。蔵書票の専門版画誌『版画蔵票』第六号(刊行年不明)に掲載された、おそらくア・バイのモチーフから取られたであろうモチーフの蔵書票、『版芸術』終刊号(一九三六)の年賀状図案(図3)、『郷土玩具集』第三號(一九三四)に掲載の、雑司が谷地域が発祥とされるかわいらしい、すすきみみずくの多色木版などもご寄贈いただいています。これらの作品からは、油彩画と版画作品と、自らの体験から生成された作家の様々な結実を見ることができそうです。



図3 雑誌掲載分には右下に西暦があるため当寄贈分は試作かもしれません。

\* 町田市立国際版画美術館蔵

(美術 堀口)

### 編集後記

『かたりべ』一二九号をお届けいたします。

本号の発行から間もなく、郷土資料館はリニューアルオープンから一年を迎えます。実は先日、「郷土資料館は入りづらいから行きたくない。」と中学生の方からのご意見を耳にしました。当館はビルの上階にあり、特に若い方には入りづらい雰囲気かもしれません。

展示室内に設置しているアンケートボックスには、平成二九年一月一日のオープンから平成三〇年七月三十一日現在までの約一年弱で、総数二二〇枚にのぼるアンケートを頂戴しています。年齢欄の回答を見てみると、確かに六〇代以上が目立ち、一〇代〜三〇代は比較的少ないように見受けられます。

所在地を変えることは容易にはできませんが、少しでも様々な世代の方が来館しやすく、また親しみを持たれる館になるため、今後も魅力的な展示やワークショップを行っていきたく思います。(編集 上田)

かたりべ  
No.129



2018年9月28日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351  
URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan>